「祭り」の歴史と宇和島

１年１組　竹本つぐみ　　１年１組　横山　茅紘
１年１組　渡邉あみり　　１年２組　二宮滉太郎
１年３組　丸田　洋渡
指導者　教諭　小山　尊浩

１　課題設定の理由

日本には今日においても、四季折々の祭りが未だ現存している。しかし、現代の私たちは、祭りを「祭り」としてではなく、娯楽としてのイベントとして捉えがちである。祭りの原義を示す言葉は「祀り」であり、このことからも分かるように、発生当時の祭りは今日のそれとは目的や性質が異なっていたと考えられる。祭りの起源と現代に至るまでの変容、そして今の祭りの現状に興味を持ち、今後の宇和島における課題を祭りを通して考えてみたいと思い、この課題を設定した。

２　祭りの定義

祭りの本来の定義から確認する。祭りとは、感謝や祈り、慰霊のために神仏および祖先をまつる行為（儀式）である。まつる、と読む漢字は三つあり、その三つごとにニュアンスは異なる。ここでは、「祭り」「祀り」の違いに注目し、後述する。

３　祭りの発生と変容

人類の初めのまつりの起源には諸説ある。作物の豊穣（ほうじょう）を願う祈願であるとするものと、生殖・繁栄を願ったものが主な説である。どちらにせよ、「未来への祈願」が根底にある。日本では、縄文時代の神を模した土偶にそれが顕著である。日本に限定すると、原始宗教はますますの生殖力への願いとされているが、古くの主な祭りは呪術である。屈葬などの風習から、既に死への意識があったと考察できる。この時点でのまつりは、死者への祈りと神への信仰の意を表す「祀り」である。弥生時代には半島から米作りの風習が伝来し、祭祀（さいし）遺跡が残っていることからも、それは農耕儀礼へと形を変えたことがわかる。このとき、初めてまつりに「祭り」の形が加わったと考えられる。まとめると、祭りが慰霊、祀りが祈祷（きとう）、である。

世界では、祭りは精霊信仰から始まる。自然の事物に存在している相対的精霊、物体的な宿体を持たない絶対的精霊、すなわち神への信仰が人々の間に広がる。そして、人間が動けているのは精霊が宿っているからだと思われ、「睡眠＝一時的離脱」「死＝永久的離脱」と、精霊を軸にした考えが生まれる。一時的、永久などの考え方から、「時間」を意識し始めたと考察できる。やがて、父母を祖先とする考えが生まれる。イギリスの社会学者メインは「祖先とするのは三代以上には至らない」と述べ、「時の近接」を挙げている。

そこで、近い世代しか祈ることができない（時の近接）→父母や祖先への敬愛が大切である、と考えは変わっていった。逆説的に、祭祖は敬愛の延長の至りでありこれほど大きな孝行（祈祷）はないという考えが発生し、世界に祭りが波及していった。

４　現代における祭り

現代では、祭りは祈祷、慰霊の意味はほとんどなくなっており、ただ単に「伝統」としての継続、という意味が強く残っている。つまり、現代では、祭りは「イベント」と化しているといえる。そのような現代の祭りは、それぞれが持っている特性によって以下のように分類される。

・「文化性」……地域のもつ文化的特性や伝統祭事を主体としたもの

・「歴史性」……偉人などを賛美するなど、地域の歴史的特性に光を当てたもの
・「風土性」……地域のもつ風土的特性に立脚して創りあげたもの
・「産業性」……地場産業の振興、商業振興に焦点をあてたもの
・「芸能娯楽性」……地域伝統芸能を中心にしたもの
・「社会性」……町づくりや市民連帯等を狙ったもの。（地域イベント）

表 “東北６大祭り”の観光客入込状況と観光支出額（平成16 年度）

名称	開催県	開催期間	観光入込客数	観光消費支出額【百万円】
青森ねぶた祭り	青森県	6日間	310万人	49,689
秋田竿燈祭り	秋田県	4日間	121万人	19,495
盛岡さんさ踊り	岩手県	4日間	128万人	20,820
仙台七夕祭り	宮城県	3日間	203万人	33,171
山形花笠祭り	山形県	3日間	101万人	16,445
相馬野馬追	福島県	4日間	18万人	2,991

（荘銀総合研究所調査レポートより）

これらの七つの分類からもわかるように、現代の祭りは多様に分岐している。そして、原義を見失った祭りは、多大な経済効果を地域共同体へもたらしており、欠かせないものになっている。（上表参照）日本屈指の大規模な東北の祭りでは数日間で約５億円もの収益を得ている。

５　今後の「祭り」の課題と宇和島

私たちの住んでいる宇和島には、「和霊大祭」というものがある。漁業を中心に広く産業の神として、山家清兵衛（やんべせえべえ）が祭られている。産業の拡充、民政の安定を計った清兵衛が凶刃に倒れた事件に関与した者が、海難に襲われ続々と亡くなっていった。これを城北地方に祭ったのが始まりとされている。これを先ほどの方法に沿って分類すると、「歴史性」にあたる。

愛媛では、タオル祭りや新居浜の太鼓祭りなど、特色はあるものの、祭りの本来の意味は汲んでいない。宇和島では、祭りに歴史性は十分に表れていると言える。しかし、和霊大祭の由来を知った上で祭りに参加している人は非常に少数である。また、和霊大祭は、「歴史性」の面でいうと優れているが、経済効果の面ではまだまだ改善の余地がある。

宇和島を含め、愛媛、そして日本のこれからの祭りは、本来の祭りの意味を汲んだ、歴史的、文化的なものであることが大事である。そして、時代に順応して、経済効果も両立したような祭りの改善、そしてその祭りが起こっている由来・起源を少しでも参加者が意識することが、現代の祭りに最も必要なことであると私たちは考える。

６　参考文献

・「祭祀乃禮と法律」　穂積陳重著　岩波書店　(1917)
・「日本の宗教」　村上重良著　岩波ジュニア新書　(1981)
・「愛媛県百科事典下巻」　愛媛新聞社　(1985)
・一般財団法人　地域活性化センター　http://www.jcrd.jp/
・和霊神社　【宇和島市観光協会】　宇和島市観光ガイドWEBSITE
http://www.uwajima.org/spot/index3.html
・月刊地域づくり（一般財団法人　地域活性化センター）
平成22年７月特集　祭り文化の再生と地域活性化
http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/book/monthly/1007/html/f13.htm